『虞美人草』ロンドンの池

Junko Higasa

『虞美人草』第十一章に、以下のような文がある。

> 運命は丸い池を作る。池を回(めぐ)るものはどこかで落ち合わねばならぬ。落ち合って知らぬ顔で行くものは幸(さいわい)である。人の海の湧き返る薄黒い倫敦(ロンドン)で、朝な夕なに回り合わんと心掛ける甲斐もなく、眼を皿に、足を棒に、尋ねあぐんだ当人は、ただ一重の壁に遮られて隣りの家に煤けた空を眺めている。それでも逢えぬ、一生逢えぬ、骨が舎利になって、墓に草が生えるまで逢う事が出来ぬかも知れぬと書いた人がある。運命は一重の壁に思う人を終古に隔てると共に、丸い池に思わぬ人をはたと行き合わせる。変なものは互に池の周囲(まわり)を回りながら近寄って来る。不可思議の糸は闇の夜(よ)をさえ縫う。

この「池」は東京勧業博覧会が開催された上野公園内の不忍池であるが、そこに重ねられたのは、ロンドンのハイド・パーク(Hyde Park)にある池だろう。その公園内には 1851 年に、世界初の万国博覧会の会場としてクリスタル・パレスが建てられた。そしてそこにあるサーペンタイン・レイク(Serpentine Lake)という池は、その敷地を二分するところに位置する。それはまるで小野と藤尾を分かつ運命のような池である。

そして上記は、上野公園の博覧会でダイヤモンドのようにイルミネーションが輝く場面である。すなわちハイド・パークの博覧会で、鉄とガラスでできているクリスタル・パレスが、文字通りクリスタルのような光を反射する場面である。その博覧会々場で、小野(漱石)は人波に押されて気分が悪くなった小夜子のために茶店へ這入るが、女王のような藤尾が後からやってきて二人の存在に目を止めたとは濠も気付かない。一方ロンドンの漱石は、ヴィクトリア女王の葬儀を見るために、混雑を予測した宿の主人の言に従って、一駅先のハイド・パークで人波にもまれながら主人の肩車で葬列を眺めたが、目にすることができたのは衛兵の上半身と、白に赤をもって覆われた女王の柩だけだった。上野の小野も、ロンドンの漱石も、自分の意思の選択ではない場所で女王に近接した。そして運命の丸い池は、漱石の筆上でヴィクトリア女王と藤尾を引き合わせる。漱石はこのとき「女王の死」に「藤尾の死」を重ねていたのではあるまいか。これより以降、ヴィクトリア朝の栄華は衰退し、藤尾の栄華にも影がさす。

さらにロンドンの漱石は、眼を皿に、足を棒にして下宿を探し、5 回も引越して節約した金で出来るだけ多くの書籍を手に入れようとするが、経済苦境の壁に阻まれて、英国の首都にいながら、文学とは縁遠い庶民階級環境で正統派英語も英文学も思うように修められない。一方東京の小野も、資金不足の壁に阻まれて、自分の未来を拓くための道筋を目前にしながら、なかなかそこへたどり着けない。

そして博覧会のイルミネーションは「経済」の象徴であり、無学無頼でも西洋化の波に乗って金さえ持てば買える文化である。その変な光りが回りながら近寄ってくるところに、水のきれいな『池ガアルカイ』『アゝ有ルョ』日本の未来を救う『魚ガ居るか居ないか受合わないが池は慥かにあるよ』不可思議の糸は正義を縫う。(2014.8.26)